

# 中世軍記・戦国軍記比較研究 ——合戦叙述を中心に——

遠 山 沙 央 里 ・ 今 井 正 之 助

## 序

『平家物語』と『太閤記』を読み、同じく合戦を扱う作品であるにも関わらず、受ける印象がかなり違うと感じた。その違いはどういった理由によるものだろうか。『平家物語』と『太閤記』との間には、合戦を主材とする作品が他にもあるが、どの辺りからそうした変化が生じたのだろうか。

「軍記物語」に関して、『日本古典文学大事典 第二巻』（岩波書店、一九八四）「軍記」の項目は、沿革を古代末期・中世前期・中世後期（以上、永積安明執筆）と戦国期（笹川祥生執筆）とに分けて説明している。

中世前期の軍記に関しては、『平家物語』が最も高度な文学的成熟を遂げたといわれ、中世の軍記の代表とされる。北川忠

彦「軍記物の流れ」（文学40—7、一九七二・七）では、元々記録的な要素を含む軍記が、『平家物語』から物語性が強まったとし、次第に「ある一族、ある個人に焦点をあて」る傾向となり、その傾向が中世後期以降の軍記にも影響を及ぼしたとしている。中世の軍記は、物語的な特質が強いといえる。

中世後期の軍記『太平記』に続く作品は、室町軍記と呼ばれる。室町軍記は一つの事件に対して様々な作品が現れた時期であり、分散的傾向がある。その特徴は、梶原正昭「室町時代の軍記」（国文学9—14、一九六四・一一）によると、室町軍記の中でも中世軍記の特徴を受け継ぐものとそうでないものがあるという。

戦国期の軍記に関して、笹川祥生「戦国軍記序説（その一、二）」（京都府立大学学術報告20、22。一九六八・一〇、一一）は、事

実が記録されていることに存在意義があり、記録的な要素が強いという従来の説に対し、すべてが「事実」とは言い難く、「令名」を記録するためのものと位置付けた。いずれにせよ、戦国期の軍記には、「記録的叙述」の特徴があるといえる。

以上、それぞれの時期の軍記を特徴づけるのは、「物語的叙述」と「記録的叙述」であり、前者から後者へと変化していくと説明されている。また、叙述に関しては、個人への注目度も影響を及ぼす、と指摘されている。

しかし、中世軍記から戦国軍記までを通覧して、詳細に分析した研究は少ない。先行研究で指摘のある「物語的叙述」「記録的叙述」「個人に焦点を当てた叙述」をキーワードとして具体的に掘り下げ、合戦叙述の変化を通して、中世軍記と戦国軍記の相違点を明らかにすることを目指す。

前述した『日本古典文学大事典 第二巻』を参考として、中世前期・中世後期を一括して、中世軍記と称し、『平家物語』・『太平記』・『明德記』・『応仁記』（二種類）を取り上げる。戦国軍記は、『信長公記』・『太閤記』を取り上げる。なお、『太平記』と区別して、『明德記』『応仁記』（二種類）を一括して扱う場合は、これらを「室町軍記」と呼び分ける。

また、キーワードとして挙げた「物語的叙述」と「記録的叙述」については、以下のように定義づけた。

物語的叙述とは登場人物の行動に焦点を当てた叙述<sup>①</sup>、記録的叙述とは事態の推移に焦点を当てた叙述<sup>②</sup>である。

合戦叙述に関して、合戦を戦闘前・戦闘中・戦闘後に分け、さらにそれぞれに個人に焦点を当てた項目を立てて考察していく。

戦闘前では「手分け・布陣」と「作戦」を立てた。前者は、軍勢と個人の動きや判断がどうなされているか、後者は戦闘が始まるまでの過程はどう決定されているかを考察するためである。

戦闘中では「個人に焦点を当てた叙述」と「抜懸け」を立てた。これは、戦闘における個人の描写を分析するためである。特に後者は、禁止事項を個人の判断で破っており、そこに個人の思いが強く表れていると考えたため、特に取り上げた。

戦闘後では「首の特定」を立てた。手柄を示す手段としての首の特定は、同時に、討ち取った個人に焦点をあてるものであるが、時代を追うにつれ、叙述のあり方に変化が見られるからである。

なお、使用テキストは以下により、成立順は、『室町軍記総覧』（明治書院、一九八五・一二）に従った。『応仁記』の一卷本を「応仁記①」とし、三巻本を「応仁記③」とし、総称する場合は、「応仁記」と記す。

『平家物語』 覚一本…岩波文庫

『太平記』 流布本…新潮日本古典集成

『明德記』（三巻本）…群書類従

『応仁記』（一卷本）…群書類従

『応仁記』（三卷本）…群書類従

『信長公記』…角川文庫

『太閤記』…新日本古典文学大系 60

この他に『応仁略記』（二卷本）、『応仁別記』（二卷本）を参照したが、『室町軍記総覧』によれば、『応仁略記』は僧侶の手によるとされ、仏教的な側面がかなり強い。『応仁別記』は赤松氏に近しい者の手によるとされ、私軍記的要素が強い。この二つの作品は特異であるため、今回の研究では除外する。

## 一、戦闘前の叙述の変化

### 1、手分けと布陣

ここでは、空間的な「手分け」と「布陣」を見ていく。

「手分け」とは、戦闘前に行われる武士の担当方面の配置をいう。「布陣」とは、各方面で戦場の地形や相手の態勢等に応じてなされる軍勢の配置をいう。

まず、「手分け」についてである。

『平家物語』巻第七「火打合戦」では、火打が城に籠る義仲に対し、平家は大手・搦手それぞれに大將軍と侍大將を決め、砥浪山と志保の山（火打が城へ向かう途中の山々）へ向かわせる。このように、『平家物語』の手分けには、手勢が大手・搦手という大まかな方面に分けられ、それぞれに大將軍などが命じられる形式が多い（他に、巻第四90頁、巻第五234頁、巻第

七76頁、巻第八176頁、巻第九232頁、巻第十118頁・120頁等）。

『太平記』では、『平家物語』に見られた「大手・搦手」を記した手分けもあるが（たとえば、巻二95頁・96頁、巻九22頁、巻十96頁、巻十四361頁・362頁、巻十七97頁、巻二十一399頁・400頁、巻二十九343頁、巻三十二59頁・60頁、巻三十八351頁・352頁等）、これらの手分けと異なり、新しく加わった手分けがある。巻三「笠置軍の事付けたり陶山・小見山夜討の事」では、幕府方が笠置の城を攻めるに当たり東西南北の手を決めている。この手分けには城を包囲して攻めるという意図があり、より具体的かつ実戦的になった手分けとなっている。

『明德記』「応仁記」「信長公記」「太閤記」も『太平記』と同様である（『明德記』上241頁、245頁、下290頁、『応仁記①』53頁・73頁、『応仁記③』378頁・379頁・398頁、『信長公記』巻二98頁・99頁、巻五132頁、巻七171頁・174頁、巻八193頁・194頁、巻十一245頁・246頁、巻十四362頁・363頁、『太閤記』巻三68頁、巻四89頁、巻九214頁等）。

『平家物語』では、軍勢は大まかな空間に配置されていたが、『太平記』以降はより細かな攻め口を考慮した配置となっている。

次に布陣についてである。

『平家物語』巻第七「火打合戦」では、義仲は平家が攻め寄せてくるのを聞き、軍勢を七手に分けて敵を迎え撃つ形で布陣する。しかし、この七手が後の戦闘で効果的に活躍する叙述は

ない。『平家物語』は相手の動きに応じて布陣するのみで、実戦的ではないといえる。

『太平記』巻三「赤坂の城軍の事」では、幕府方の軍勢が攻めてくるのを見て、正成は城内に射手を二百余人残し、七郎と正遠とに三百余騎を引き連れさせて他の山へ布陣する。幕府方が城に手こずって休息しているところへ、頃合いを見て三百余騎がさらに東西に分かれて攻める。この布陣が効果的に働き、正成方は勝つことができた。『太平記』では、『平家物語』と同様に相手に合わせて布陣するが、より実戦的となっている。

『明德記』「応仁記」「信長公記」「太閤記」では、『太平記』のような「布陣」は見られず、手分けで定められた方面で戦っている。

『太平記』から実戦的な特徴が表れ始めたものの、『平家物語』と同様に相手の動きや地形に合わせて戦闘を行っていることが分かる。一方、『明德記』以降は、最初の手分け通りにその場で戦っており、配置の変更は見られない。つまり、『明德記』から叙述の変化が表れていることが分かる。

## 2、作戦

作戦には二つのパターンがある。一つ目は登場人物たちの会話によって行われるものである。たとえば、『太平記』巻八「持明院殿六波羅に行幸の事」の記述である。陶山が味方の手勢に興の声を上げさせて敵の気を引いているうちに、少人数で自分

たちが東から敵を攻める作戦を提案する。それに対し河野が賛成し、実行する。この場面の作戦は、陶山と河野の会話によってなされている。このように、登場人物の会話をういて作戦を叙述していくものを「会話」とする（他に、『平家物語』巻第五「富士川」、『明德記』上250頁、『応仁記①』「相国寺蓮池頼之事」、『応仁記③』「御霊合戦之事」、『信長公記』巻十五（33）「中将信忠卿、二条にて歴々御生害の事」、『太閤記』巻一「秀吉卿輕一命於敵国成要害之主事」等）。二つ目は語り手が作戦の経緯や進行を説明するものである。こちらを「地の文」とする。

語り手が「会話」を取り入れることは、攻めるまでの過程が個人の行動を通して語られるということである。個人がどのように考え、行動を起こしたのかが分かるため、「会話」の量の多さが叙述の変化に影響すると考えた。そこで、各本の会話の割合から考察していく。表1は、それぞれの作品の作戦記事のうち、「会話」が占める割合である。

「会話」の割合が半分以下となったのは、『応仁記①』からである。以降の作品も、半分に至らない。後世になるにしたがって、徐々に「地の文」による作戦の叙述が目立ち始めたことが分かる。つまり『応仁記①』から、語り手が個人を介さずに決定事項を説明するため、記録的叙述へと変化したといえる。

表1. 作戦のうち「会話」が占める割合(%)

	作戦記事数	会話	地の文	(%)
平家物語	7	6	1	86
太平記	66	34	32	52
明德記	12	7	5	58
応仁記①	8	3	5	38
応仁記③	15	4	11	27
信長公記	7	1	6	17
太閤記	30	7	23	23

## 二、戦闘中の叙述の変化

### 1、戦闘中における個人に焦点を当てた合戦描写

各戦闘を「個人対個人」「個人対集団」「個人対集団(個人)」、「集団対集団」「集団(個人)対集団」「集団(個人)対集団(個人)」に分けた。<sup>3)</sup>「個人」とは、手柄をあげるために集団から離れて一人となったもの、もしくは集団からはぐれて一人になってしまったものである。「集団(個人)」とは、戦っているのは集団であるが、その中でも特に個人に脚光を当て、その活躍が

描かれているものである。これらを数値からの考察と叙述からの考察に分けて見ていく。

まず、数値からの考察である。

次の表は、各本の戦闘を種類分けし、その中に占める「個人」のみの戦闘の割合を抽出したものである。

表2. 諸作品の戦いについて

	平家物語	太平記	明德記	応仁記①	応仁記③	信長公記	太閤記
「個人」対「個人」	5	16	1	1	4	2	2
「個人」対集団	4	24	0	0	1	0	2
「個人」対集団(個人)	2	1	0	0	0	0	0
集団対集団	38	190	21	18	18	52	45
集団(個人)対集団	14	42	8	7	7	11	8
集団(個人)対集団(個人)	11	20	2	0	0	3	3
戦闘総数	74	298	31	26	54	68	60
「個人」関連の数	11	41	1	1	5	2	4
「個人」の占める割合(%)	15	14	3	3	1	3	7

戦闘種類のうち、「個人」関連の占める割合に注目すると、

大きな変化が表れたのは『太平記』と『明徳記』の間であることが分かる。室町軍記から「個人」への注目度が低くなったことによって、記録的叙述へ変化していったといえる。戦国軍記の中では、『信長公記』が室町軍記のように「個人」に注目しないが、『太閤記』は「個人」に再び焦点を当てている結果となった。これは、『太閤記』の構成とかわりがあり、叙述からの考察と合わせて分析する。

次に、叙述からの考察である。ここでは、「個人」に関する戦闘に絞って叙述を比較していく。

比較に際し、四つの視点を立てた。(i) 武装描写、(ii) 名乗り、(iii) 思い、(iv) 戦闘の状況である。(i) (ii) は「個人」の特徴や主張を叙述しているか、(iii) は戦闘の中で個人的な感情を語り手が取り上げているか、(iv) は戦闘で個人の行動にどのように注目しているかを、それぞれ見ていくためである。

『平家物語』巻第九「敦盛最期」では、敦盛と直実が戦う。(i) 直実の武装描写と(ii) 直実の名乗りが描かれ、(iii) 直実が敦盛と息子の小次郎を重ね合わせて子どもへの愛情や武士の悲しさなどを語る。また、同「忠教最期」では、忠教と六野太が戦う。忠教は六野太を馬上で二刀、落馬してから一刀突き、六野太に軽傷を負わせる。その後、(iv) 助けに來た六野太の従者に忠教は右手を肘から切り落とされるという状況となっている。このように、『平家物語』は四つの視点がすべてあり、特

に(iv)では個人がどう動いたか、どこに怪我を負ったかまでを詳述している。

『太平記』巻二十九「將軍上洛」では、光政と忠実が戦う。(i) 二人の武装描写、(ii) 二人の名乗りが描かれる。(iv) ともに接近し、光政が打てば忠実が受け流し、三度向かって三度退き、激しく戦ったため、両者の武器は折れてしまうという状況となっている。また、巻二「師賢登山付けたり唐浜合戦の事」では、(iii) 快実が向かい来る幼い幸若丸を見て、法師の立場から情けを感じて軽いなす。『太平記』も『平家物語』と同様に四つの視点がすべてある。

『明徳記』中250頁では小林と義弘が戦い、(i) 義弘の武装描写が描かれる。(iv) 小林が義弘に走りかかり、しゃがみ込んで二太刀切り上げ、義弘は左腕を二ヶ所切られ、小林は義弘の反撃に対応しているときに片足を切り落とされる。『明徳記』には(i)と(iv)の視点だけである。

『応仁記①』『大内介上洛之事』(87頁)・『応仁記③』二「三寶院責落事」では(どちらも同じ内容を取り上げている)、基綱と源三が戦う。(iv) 基綱は手を切り落とされ、源三は頭を割られる。「応仁記」は(iv)の視点のみである。

『信長公記』首巻「山城道三討死の事」では、長屋と柴田が戦う。(iv)「柴田が」長屋に渡し合ひ、真中に相戦ひ、勝負を決し」て柴田が勝つ。『信長公記』も(iv)のみであるが、これまでに見られたような「個人」の行動や怪我などには触れ

ず、事態の推移を描くのみである。

『太閤記』巻四「加賀勢越中表勲之事」では、細井と倉智が戦う。(iv) 組み合い、「上になり下になり」戦って倉智を討つ。

『太閤記』も『信長公記』と同様である。

以上、叙述を比較したところ、『太平記』までは全ての要素があつたが、『明徳記』から(ii)、(iii)の要素が消え、『応仁記』から(i)も消えて(iv)のみとなつていったことが分かる。中世軍記から戦国軍記に至るまでに、段階的に「個人」に関する要素が減少していく。一貫して残っていた(iv)は、戦国軍記からは事態の推移に焦点を当てた叙述に変化している。「個人」に焦点を当てる要素が抜け落ちていったことに加えて、残った要素まで記録的になったという、二度の変化を遂げていることに注意したい。

また、戦国軍記の中でも変化が起つた。その変化は、表2の『太閤記』『個人』の割合が『信長公記』よりも増加している点と、以下に述べる作品構成の相違点とに現れている。

『太閤記』の「個人」の割合が若干増えているのは、列伝形式で特定の武将の生い立ちや戦歴を述べる、巻十八と巻十九があるためだと考える。これらの巻は、巻十七までの秀吉の幼少期から朝鮮出兵までの歴史の流れを追った巻とは完全に切り離した別話として描かれており、特別に「個人」に焦点を当てている。『信長公記』までの作品で見られたような、一つの歴史の流れの中で「個人」を取り上げていくのではなく、流れから

切り離して「個人」に焦点を当てようになつたという、新しい「個人」の取り上げ方と捉えることが出来る。この取り上げ方は、「個人」に注目してはいるが、構成は個人の列挙である。たとえば、巻十八は、題を「太閤記諸士之伝記」とし、「織田酒造丞」「松山新助」「中条小一郎」「竹中半兵衛尉」などの目録から成っており、「個人」の働きを一人一人取り上げている。

この別記された中での「個人」の描かれ方を、巻十九「山中鹿助伝」を例に挙げて見ていく。ここでは、鹿助と狼助が戦い、狼助は鹿助に右の小鬘を切られる。二人は「引よせ無手と組で、上になり下に成まるびあ」って組み討ちし、鹿助は向脛を割られる。室町軍記までに見られたような、個人の行動や怪我などに触れて、個人に焦点を当てていることが分かる。

『太閤記』は、巻十七までのように合戦全般を歴史の流れと合わせて語る場合には、『信長公記』と同様に事態の推移に焦点を当てた記録的叙述となっている。しかし、巻十八、巻十九のように「個人」を取り上げる場合には、叙述は個人に焦点を当てていても、構成は今までにない別記という形をとっており、記録的となっている。

## 2、抜懸け

「個人」の思いが強く表れた事例である「抜懸け」を考察していく。

「抜懸け」は、『平家物語』と『太平記』と『応仁記③』には

あったが、『明德記』『応仁記①』『信長公記』『太閤記』にはなかった。

『平家物語』と『太平記』には、拔懸けをする人物には「武装描写」と「名乗り」がある。『平家物語』巻第九「二之懸」を示す。

熊谷はかちのひたゝれに、あか皮おどしの鎧着て、くれなるのほろをかけ、ごんだ栗毛といふ、聞ゆる名馬にぞ乗ッたりける。小二郎は、おもだかを一しほすッたる直垂に、ふしなは目の鎧着て西楼といふ白月毛なる馬に乗ッたりけり。旗さしはさちんの直垂に、小桜を黄にかへいたる鎧着て、黄河原毛なる馬にぞ乗ッたりける。(中略)熊谷は浪うちきはより夜にまぎれて、そこをつツとうちとほり、一谷の西の木戸口にぞおしよせたる。その時は、いまだ敵の方にもしづまりかへッておともせず、御方一騎もつゝかず。(中略)かいだてのきはにあゆませより、大音声をあげて、『武蔵国住人、熊谷次郎直実、子息小二郎直家、一谷先陣ぞや』とぞ名のツたる。

『太平記』巻六「赤坂合戦の事付けたり人見・本間拔懸の事」の人見も、同様に語られる。『平家物語』と『太平記』の語り手は、拔懸けをする人物に焦点を当てて語っているといえる。また、語り手が拔懸けする人物に共感していることが分かる記述がある。『太平記』の以下の記述である。

大将阿曾彈正少弼、…拔懸けの輩においては、罪科たるべ

きの由をぞふれられる。

これは、前述した人見と本間が拔懸けする前に、あらかじめ大将が決めたことである。語り手は、大将から禁止されたことを述べた上で、人見が拔懸けに込めた思いを語る。人見が禁止事項を破った理由は、味方の勝利は目前であるが、自分は高齢であるため、残り少ない寿命で死ぬよりも最期に名を挙げて死にたい、という強い気持ちからであった。語り手は大将に禁止されたことと、個人が強い思いで禁止事項を破ったことを両方とも描くことで、登場人物の思いに即し、罪科を犯す者に同情的になっている。語り手が登場人物の心境に寄り添い、登場人物への距離を近くして語っているといえる。ただし、禁止するのみで拔懸けを取り上げない場合もある。(たとえば、『太平記』巻十七<sup>102</sup>頁など)

『応仁記③』一「武衛家騒動之事附畠山之事」では、先陣は誰もが岡部兄弟だと考えていた。しかし実際には、初参の馬場が起用されたため、岡部兄弟は悔しく思っていた。馬場自身にもためらいがあり、なかなか先陣を切らないまま控えていた。それを見かねて、岡部兄弟は馬場に武を見せつけるために拔懸けする。『太平記』まで見られた、拔懸けした人物である岡部兄弟の「武装描写」や「名乗り」はないため、『太平記』と比べると個人に焦点を当てていないといえる。

一方、拔懸けのない『明德記』『応仁記①』『信長公記』『太閤記』では、拔懸けの禁止は暗黙の了解として書かれている。



取上げて取り上げていることから、語り手は登場人物の心境に迫らない姿勢をとっているといえよう。

以上から、語り手の登場人物への距離に変化が現れたことが分かる。

中世軍記では、武装描写や名乗りによつて個人に焦点を当て、さらに思いにまで迫っており、語り手の登場人物への距離は近いといえる。

室町軍記では、拔懸けを取り上げるものと取り上げないものが表れる。取り上げる場合も、中世軍記にあった武装描写などは見られず、語り手の登場人物への距離は、中世軍記よりは遠くなっているといえる。

戦国軍記では、取り上げることすらしない。距離はより遠くなったといえる。

このように、後世になるに従つて徐々に語り手の登場人物への距離が開いていったことが分かる。語り手からの距離に変化が現れ始めた『明德記』と『応仁記』の間で、記録的叙述へ変化していったと考える。

### 三、戦闘後の叙述の変化―首の特定―

ここでは、戦闘後の処理として、討ち取った首の扱われ方の中でも、個人を特定する描写を見ていく。

『平家物語』巻第七「真盛」では、光盛が誰か分からず討ち取つ

た首を義仲のもとへ持つてくる。義仲は首を見て真盛だと思つたが、真盛にしては髪が黒く不審に思い、樋口次郎に確認させる。首を洗うことで真盛が髪を黒く染めていたことが分かる。真盛と特定する過程で、真盛が生前、年甲斐もなく若武者と争つていると思われたいと述べていた事や老武者と侮られたくない気持ちであつたことを語り、話を広げている。

『太平記』巻二十「義貞自害の事」でも同様に、重国が誰か分からず討ち取った首を高経のもとへ持つていく。そこで、首が義貞に似ていること、義貞が負つていたという「左の眉の上に矢の傷」があること、義貞が所有していたという「鬼切」「鬼丸」の二太刀があつたことから、義貞だと特定する。『平家物語』と同じく、首自体の特徴から特定をしているが、この傷の由来には触れていない。このことは、三五一頁頭注一六が「本来ならば、ここでその傷の由来を、これまでの物語の展開と関連づけて語るべきであるが、それを欠いている。首の主を明かすための手法を採用するにとどまったと見るべきか」と指摘している。『平家物語』と同様に、首を特定する過程が個人に関する話を広げていく可能性をもっている。

『明德記』中では、人に尋ねることで小次郎の首だと特定する描写があり、『応仁記』①「武衛騒動の事」では周りの状況から政長の首だと特定する描写があつた。

『応仁記』③「信長公記」「太閤記」には不明の首を特定する描写はない。

以上をふまえ、さらに三つの視点から考察していく。

まず、特定する方法について。特定する方法は、『太平記』までは首自体の特徴であった。しかし、『明德記』と『応仁記①』では、首自体ではなく、周りの人々や状況などからの特定になっている。『応仁記③』からは、特定すら行われない。このことから、特定する方法が徐々に首自体から離れていることが分かる。つまりこの点においても、徐々に個人に焦点を当てなくなっているといえる。

次に、首の特定が、主の生前の様子や思いを語るきっかけとなっていることである。語り手が個人の思いに寄り添い、話を広げていくのである。きっかけとしての首の特定は、室町軍記から消えていった。このことは、語り手が討ち取られた者の思いに触れず、語り手の個人との距離が広がったことを示していると考ええる。

最後に、首の特定の過程が省かれ、討ち取ったという事実のみ記録する形に変わっていることに注目したい。その変化は、『信長公記』に始まる。以下は、『信長公記』首巻「もりべ合戦の事」の記述である。

長井甲斐守 津嶋の服部平左衛門討とる。

日比野下野守 津嶋恒河久蔵討とる。

神戸将監 津嶋河村五郎討とる。

頸二つ 前田又左衛門討とる。

戦闘の様子は描かれず、手柄をあげた者や首の数が戦闘後の

記録として列挙されている。ここにも新しい「個人」の描き方がみとれる。「個人」の活躍に目を向けてはいるが、戦闘の過程がない結果の列記であって、記録的である。このような討ち取った首の列記は、同じ戦国軍記である『太閤記』にも受け継がれている。

以上から、首の特定について、個人に焦点を当てずに語り手の登場人物への距離が開き始めた室町軍記からと、新しく列記の叙述が現れた戦国軍記からの二度、記録的叙述への変化が起きたといえる。

## まとめ

物語的叙述から記録的叙述へと変化した要因は、以下の三点にまとめられる。

### ○「個人」への注目度

個人に関する行動や物語を進めるうえでの過程を詳述することによって、作品の中に個人の活躍が生まれる。これが少なくなっていくと、個人が目立たなくなり、記録的叙述となる。

### ○登場人物と語り手との距離

登場人物の思いに対して、語り手が共感的に語っているか否かで判断することが出来る。語り手が登場人物と距離を置くにつれ、個人に焦点を当てなくなり、記録的叙述となる。

○新たな「個人」の描かれ方

叙述の方法や構成が変化したことから判断することが出来る。「個人」を取り上げる際、伝記的に取り上げていくことで、記録的になる。

右に挙げた要因の変化した時期をまとめて表示すると、以下のようになる。

表3. 考察のまとめ

作品名 項目	戦闘前		戦闘中		戦闘後
	手分け・布陣	作戦	個人	拔懸け	首の特定
中世					
平家物語	◎	◎	◎	◎	◎
太平記	◎	◎	◎	◎	◎
明徳記		◎	○		○
室町					
応仁記①			△		○
応仁記③			△	◎	△
信長公記			△		
戦国					
太閤記					

〔凡例〕○……物語的叙述（個人に焦点を当てた叙述）

○……準物語的叙述（上記に少し変化が表れた叙述）

△……準記録的叙述（上記にさらに変化が表れた叙述）

無印……記録的叙述（事態の推移に焦点を当てた叙述）

表3から、記録的叙述への変化は大きく二度起こっているといえる。

第一の変化は、室町軍記に見てとれる。戦闘中「個人」、戦闘後「首の特定」など、要素が徐々に変化し、段階的な様相を呈している。そのため、室町軍記段階で一気に変化したという印象は受けないが、記録的叙述へ変化する過渡期となっている。

第二の変化は、戦国軍記の段階で起こった。第一の変化で記録的叙述に進んだことに加えて、伝記的記述を別記するという構成が変化に拍車をかけた。二度の変化を通して、合戦叙述は着実に記録的叙述へと変化していったといえる。

最後に、それぞれの軍記の特質についてである。時代を跨ぐため、歴史的な戦闘の変化も視野に入れて考察していく。まず、歴史的な戦闘の変化である。

高橋典幸編著『日本軍事史』（吉川弘文館、二〇〇六・二）によると、鎌倉時代頃の戦闘は「個々の武士団ごとの突撃を主体とするもの」であったという。そして戦国時代になると、大将の命令が絶対であり、大将に従って戦うようになったという。戦闘は、個人中心から集団中心へと変化したのである。考察してきた作品の叙述も、基本的には個人から集団へと変わってきている。

中世軍記は、歴史的に見て個人が重視された戦闘であるため、軍記においても実際の戦闘をそのまま合戦の全貌の記述と個人

の活躍を分離せずに語ることが可能である。この同時に語ることができる構成が、中世軍記の特質であると考ええる。

室町軍記は、中世軍記と戦国軍記の過渡期である。叙述はどちらの特徴も兼ね備えているが、構成は中世軍記に習い、合戦の全貌と個人の活躍が分離せずに語られる。中世軍記に近いが、細かな点では変化していることが室町軍記の特質である。

戦国軍記は、集団が重視された戦闘であるため、合戦の全貌の中に個人の活躍が入らない。中世軍記のような構成をとろうとすれば、戦闘を語ることが出来ないで、作品が成り立たなくなってしまう。それでも個人に注目したい場合には、苦肉の策として合戦の全貌とは別に伝記的な項目を立てて取り上げるという方法にせざるを得なかったといえる。このことが、戦国軍記の特質であると考えられる。

## 注

(1) 例、『平家物語』巻第九「樋口被討罰」の以下の記述。

（茅野太郎光広は）あれにはせあひ、これにはせあひ、敵三騎きッて落し、四人あたる敵におし並べて、ひッくんでどうど落ち、さしちがへてぞ死ける。

光広の戦闘が詳細に描かれている。敵と組み合い、どのようにして死に至ったのが細かく、個人に焦点を当てて述べられているといえる。

(2) 例、『太閤記』巻十二「松山之城降参之事付八王子落城之事」の以下の記述。

彼に推詰此に開き合せ戦て、近藤は終に打死してけり。

近藤の戦闘が描かれるが、死ぬまでの具体的な様子は書かれていない。戦い死ぬ、という、戦闘の結末を簡単に述べている。個人ではなく、事実の推移に重点を置いているといえる。

(3) 種類別に具体例を挙げていく。

\*個人対個人

『平家物語』巻第九「敦盛の最期」での敦盛と直実の戦いのような一騎打ちである。他作品では、『太平記』巻十七「山攻めの事付けたり日吉神託の事」での泰氏と定範、『明德記』上での小林と義弘、『応仁記①』「大内介上洛之事」・『応仁記③』「二「三寶院責落事」での野老源三と基綱、『信長公記』首巻(30)「山城道三討死の事」での長屋と柴田の戦いなど。

\*個人対集団

『平家物語』巻第九「木曾最期」での、兼平が頼朝方の勢を蹴散らすような戦いである。他作品では、『太平記』巻二十二「大館左馬助討死の事付けたり篠塚勇力の事」での篠塚と足利勢、『応仁記③』「二「室町亭行幸之事」での斎藤と勝元衆の戦いなど。

\*個人対集団（個人）

『平家物語』巻第七「篠原合戦」での長綱と行重勢の戦いで

ある。ここでは、長綱一人に対して行重が自らの郎党と共に戦っている。行重勢は、主に行重の活躍に焦点を当てて語られている。他作品では、『太平記』巻十三「兵部卿宮薨御の事付たり干将莫耶が事」など。

#### \* 集団対集団

『平家物語』巻第九「俱利伽羅落」での源氏と平家の戦い。個人の名前が出ていても、組み合うなどの目立った描写のないものも含む。

#### \* 集団（個人）対集団

『平家物語』巻第九「二度之懸」での源太を探す景時と新中納言の軍勢の戦い。景時は郎党と共に戦っているが、主に景時の活躍が描かれている。他作品では、『太平記』巻一「頼員回忠の事」での小笠原孫六と六波羅勢、『明德記』中での時熙と奥州勢、『応仁記①』『武衛騷動之事』・『応仁記③』一「御靈合戦の事」での竹田与次（『応仁記③』では與二）と遊佐勢、『信長公記』巻十一（13）「荒木摂津守逆心を企て」に伴天連の事」での武藤と荒木勢の戦いなど。

#### \* 集団（個人）対集団（個人）

『平家物語』巻第十「弓流」での、みをの屋の四郎と平家方の武士の戦い。みをの屋の四郎の他には四騎おり、その中でも特にみをの屋の四郎と平家方の武士の組み合う戦いとなっている。他作品では、『太平記』巻八「四月三日合戦の事付たり妻我孫三郎勇力の事」での田中と島津、『明德記』中

での一色左京大夫と氏清、『信長公記』首巻（34）「浮野合戦の事」での林と佐脇の戦いなど。

#### 付記

本稿の礎稿は遠山が二〇一五年一月に提出した同題の卒業論文である。本誌掲載にあたって、今井が体裁・字句を整えたが、ほとんど卒業論文そのままである。連名は、事務的な都合に過ぎない。

三年生春の卒業論文のテーマ設定に際し、『平家物語』『太平記』『太閤記』を候補にあげ、かつ多くの作品を読んでいたというので、合戦叙述から見た中世軍記物語の特質という方向も考えられる、と応じたのが発端である。作品選定等の相談には乗ったが、『平家物語』以下次々と読み進めていく中で、遠山は自力で分析視点を見いだしていった。

むろん限界は多い。遠山自身が自覚していることであるが、本稿はあくまでサンプル的な調査である。室町・戦国軍記は多種多様であり、中世軍記にも異本の問題がある。「首の特定」の問題でも、たとえば忠度の場合、覚一本等の身に帯びていた和歌による判明は首自体の特徴に準じるものとみなすとしても、延慶本は明らかに周りの人々の情報によっている。さらに、本稿は「不明の首を特定する描写」に限定しているが、『明德記』には、山名方の家喜九郎の首にあった「左ノ鬢ノ髪少シ切タル

跡」から家喜と女房の逸話が語られる。この逸話は、加美宏「軍記物の行方―室町・戦国軍記の展望―」（国文学研究資料館講演集8、一九八七・三）がとりあげているが、これも本稿にいう「首を特定する過程が個人に関する話を広げていく」型であり、『明徳記』の性格規定に少し修正が必要となろう。

また、課題に直結する先行研究として、本稿があげたものの他、以下の成果にも注目すべきであろう。

加美宏「軍記物の拡散と転生―『明徳記』から『太閤記』まで」（『軍記物の系譜』所収。世界思想社、一九八五・四）は、室町・戦国軍記の史的な展開を「本来、融合していた「記」的なものと「物語」的なものが分離し（中略）軍記物というジャンル自体が解体されていった過程」と概観する。その上で、「記」的なものの骨格復活のきざしをみせつつも、伝記を語ることに主眼がある『信長記』や『太閤記』は、「軍記物の掉尾を飾る作品」とであると同時に「近世軍記の祖というべき位置」にあり、「軍記物の近世的転生」を示すものだという。

阿部一彦「『太閤記』の合戦描写と表現―石動・荒山合戦と末森合戦―」（『太閤記』とその周辺。和泉書院、一九九七。初出一九八九・一二）は、加美の指摘を受け、『太閤記』の合戦描写を『末森記』など先行作と比較検討した。たとえば、

「引人」「付人」の類の平明で無色な「言葉」を駆使し、「町口」「三之丸」「二之丸」と視点を移動させながら戦国の城攻めの攻防を描いている

といった特徴をとらえ、『太閤記』の「秩序づけられた無色透明な描写は、臨場的軍記とは異なる興趣を生み出し」ていると評し、「一般化・普遍化の作業を通して再編成するという方法」に、加美のいう「転生」の具体相を見いだす。

加美自身（前掲一九八七論文）も、転生の具体例を次のように示している。『信長公記』にある、兵糧攻めに苦しんだ者達が敵に撃たれた味方の頭を「能味はいあり」と奪い合いをした、という記述をとらえ、これは「中世の節度のある軍記物」とは異質の、古浄瑠璃や説経の非常に残酷な面と共通するものだと指摘する。また、『大坂物語』の古田織部の負傷譚を引いて、中世軍記にはある「緊張感というようなものが、全体的に失われてしまっていて、作品全体が近世初期の『醒睡笑』などの笑い話の世界に近づいている」と評する。

加美・阿部のような、作品の内的特質に分け入った分析は魅力的である。これに比せば、本稿は外的特性の腑分けの域をあまり出ていない。しかし、管見の限り、『平家物語』から『太閤記』までを通観してのこうした試みはこれまでになかったと思う。ご批正を請う所以である。